

「DNAを遡る ～家系図は幸せ・成功情報の宝庫～」 天明塾長講話

皆さん、おはようございます。

今日はちょっと変わったテーマでありますけれども、「DNAを遡る ～家系図は幸せ・成功情報の宝庫～」です。

先祖の数は30代遡ると、地球上の人口を超えるというんだからすごいことですよ。どうも脳はその自分の先祖の情報を全て蓄積している。地球誕生以来の情報がここに入っているという人もいます。皆、海から生まれて、ずっとお腹の赤ん坊の発達状態を見ると、エラ呼吸から始まって、医学では説明されるけれど、地球誕生以来の情報が蓄積されているんだって。

私の先生には、自分、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんくらいまでが自分にすごく大きな影響を持っているので、せめて自分を含めて4代、しっかり知ろうよ、そうすると自分分かるよと、そうやって教えてもらってきました。

2番目、サムシンググレートが応援する条件。村上和雄という人が、遺伝子の不思議という本の中で言っている。村上和雄というのは筑波大学の名誉教授で、遺伝子研究の世界的権威と言われる人。村上和雄は、「色々遺伝子の構造を調べてみた結果、人間も他の動物も遺伝子構造はほとんど一緒に、植物まで一緒である。人間と八工と遺伝子構造の7割は一緒だ。3割だけが違う」、そんなことを書いていました。私もびっくりしたんですが。

村上さんはここから先、こういうわけだ。「そんなことは普通考えられない。人間だけじゃなくて他の動物も植物も、遺伝子の構造が皆、同じだということは、誰か、何か大きな大きな存在がこの宇宙を、世の中を創りたもうたとしか考えられない。」って、村上さんはこれにサムシンググレートという名前を付けたわけだ。

そのサムシンググレートというのは私の親の親の親の親の、ずっと上の親のようなものなんだ。自分の大元の親だから、自分が何か志を持ってこういうことをやりたいって思ったことをサムシンググレートが応援しないはずがない。どんなことも、自分が本気になってやろうと思ったら応援してくれるよ。だから奇蹟が起こるんだよ。

村上さんの言葉を借りると、こう言うわけだ。「志を持って何かやろうとすると、サムシンググレートがスイッチオンしてくれると、そのエネルギーがずっと伝わって、私の遺伝子がスイッチオンになる。」サムシンググレートがスイッチオンしてくれるとどんなことでも実現できると。村上さんが言っているんだよ。

ここから先は僕の思いなんだけれど、いくらここでサムシンググレートがスイッチオンしてくれても配線がつかないなければ私の遺伝子はスイッチオンにならないよ。エネルギーが伝わってくるんだから。エネルギーが伝わるだけの配線が大事だよ。理解して、信頼して、「お陰様でありがたいな」という感謝の気持ち、恩を忘れない気持ちが配線だ。「俺、母に捨てられた、非常に寂しい思いをした」と思っていると、配線が切れてしまっていて、いくらサムシンググレートが応援しようと思っても途絶えてしまう。大事なことは配線だよ。

そこで私のケースをお話ししてまとめにします。

私、茂、妻、セツ子で子どもが4人います。右からいきます、長男、これは未熟児で1,845gで生まれて、1ヶ月ガラスの保育器に入っていた。2番目が流産です。3番目長女、4番目次男、次女とこれだけ子どもがいて、これにそれぞれ配偶者がいて、孫がいるんだけど、それはちょっともう書いていません。

それまでも家系分析をやっていたんだけど、本気でやったのは、実はこの長男、これが1,845gの未熟児で生まれた。その次、流産。この2つが続いた時なんです。なぜ未熟児で生まれるか、分かります？なぜ流産するか。原因は私の妻、セツ子と私の父、鶴吉80歳とがうまくいかなかった、確執です。普通、嫁姑という言葉があるけれど私の母、タメは実は私の長兄の嫁とうまくいかなかった。それで私の長兄は家を出た。そういう経験をしているので学習していた。だから、いわゆる嫁姑がなくて、今度は私の父、鶴吉と妻、セツ子、この確執だった。

家系分析をやって分かったことは何かというと、私の妻、セツ子と父、鶴吉の確執、そしてそれは偶然そうだったんじゃないくて、私の母、タメと祖母、ゆき81歳、そしてゆ

きとブン、ここも同じことを繰り返していた。そしてさらに、このブンと曾祖父天明権左右衛門 40 歳と天明栗餅屋というところに夫婦で養子に入っているわけ。夫婦で養子に入ったんだけど、これ「×」となっているでしょう。「×」となっているのは養子縁組を解消した。

そう、代々ずっと嫁姑、嫁姑、嫁姑。一番上の天明栗餅屋、そこの夫婦が結局絶家しているわけ。その時にすごいんだよ、変な話をするみたいでごめん。だけど本当の話だから。この曾祖父、天明権左右衛門とブンがもし出て行っちゃつと栗餅屋のここは絶家するわけだ。

今は絶家ってあまり大したことじゃないけど、昔、お家断絶というのは大変な罪だったわけね。そんな時代だから、栗餅屋の夫婦は頼むわけだ、権左右衛門夫婦に。「お前達が出て行ってしまつと家はなくなつてしまつ。何としても残つてほしい」と。しかし断つて出て行ってしまつ。その時に、この栗餅屋の夫婦が言つた捨て台詞、「ここまで頼んでもお前達出て行ってしまつ、勝手にしろ、その代わり、お前達が死ぬ時は馬乗りになつて絞め殺してやるから」。

そのことを私の妻、セツ子はタメから聞いた。タメはゆきから聞いていた。ゆきはブンから聞いた。

それで私達がやつた 1 つ目のことは、その栗餅屋、絶家しちやつた家を 2 年半ぐらいかかつて探し出して、このお墓をきちつとお寺さんに頼んで祀つてもらつた。

もう 1 つは、父、鶴吉なんだ。私の父は幼少のみぎり、人質に取られた。ずっと肉体労働をさせられていたわけだ。その不信感、それがお金は使つちやいけないとか、ケチとか、人を信じないとか、そういう心になつて陰険強情、冷たい。そのことを私も私の妻、セツ子も初めて知つたわけ。

「自分は嫌われていると思つていた、でも、そうじゃなかつた、本当は、お父さんは自分を愛してくれていた、だけど、自分の苦しい経験から、その教えのつもりだつたのが自分は間違つて受け止めていた」。それから妻、セツ子は変わつていくわけ。

そうしたら私の 3 番目の子ども、長女、次男、次女と、後はちゃんと普通に生まれてくるわけだ、育つてくるわけだね。

どうか、どうか、自分の命を遡つてほしい。DNA に関心を持ってほしい。自己客観化です。できたらこの家族史、兄弟も喜んでくれる。子どもに自分の願いを伝えていくこともできる。

そんなことで今日はあくまで人間力を高めていく、そのための 1 つの手法として自分の DNA を遡つてみるということと一緒に考えさせていただきまふ。

終わります。ありがとうございます。

「誰も見たことのない世界を描き出す ～地球の果てで研究をするということ～」

講師 田邊 優貴子 氏 [早稲田大学高等研究所助教]

皆さん、こんにちは。

私は南極とか北極で生物の研究をしています。それで今日は、そこでどういうことをしているのかとか、南極とか、その辺の世界のことを紹介しながら、研究、科学について話をしていきたいと思っています。

私が何で研究者になっていったのか、ちょっと年表として作ってみました。小学校の時、星空が好きだったので、毎日星を眺めていて、将来天文学者にでもなれたらいいなと、思っていました。天体望遠鏡も買ってみたいって星空を眺めたり、色々していたんですけど、小学校3年の時、学校から帰ってきてふとテレビをつけると、NHKでシベリアとアラスカの自然ドキュメンタリー番組みたいなものやっていました。その時、テレビに映っていたのがオーロラの映像だったり、カリブーとか氷河とかツンドラ一面の映像が映っていて、子どもながらに世界が初めて広がったような気がしました。

「いやー、こんな世界があるんだ、行ってみたいな」と、その時強く思って、母親に「アラスカに行ってみたいんだけど」という話を、小学校3年生なんですけどしてみたところ、「将来、自分でお金を貯めて行け」と言われて、その時、「ああ、そうだな」と思って、しばらくそれはあまり思い出さずに、その時で止まっていました。

大学に入学してから、国内だけじゃ飽き足らなくなってバックパック1つ背負って世界の色々なところを旅するようになりました。最初に行ったのがペルーとボリビアです。それを皮切りにその翌年は東南アジアに行ったりカナダ、ノルウェーに行ったりと、もう色々なところに行きました。普通の大学生の生活を送っていた私にとって、こういう街並みでさえすごく毎日刺激的で、その後、色々遺跡を巡って、3週間ぐらい楽しかったんですね。

旅の最後、ペルーとボリビアにまたがるチチカカ湖という標高3,000mくらいに湖がある、その島の上に滞在しまして、現地の民族の人の家に泊まらせてもらったんです。

周りに全く大きな町もないし、標高も高いし、電気も通っていない、そんな島で、その夜に泊まらせてもらっていた先の主人が、「今日は丘の上でお祭りをやっているから見ておいで」と勧めてきて、「祭りか、見に行ってみよう」というふうに思ってドアを開けた瞬間、満天の星空が一面に広がっていました。それはもう本当に真っ暗で、足下が分からなくなって転びそうになるくらい真っ暗の中、満天

の星空だったので、自分が宇宙の空間に放り出されたんじゃないかと思うぐらいすごい空でした。祭りのことなんか忘れてしまって、その場で2時間、ひたすら星を眺め続けていました。

大学4年の時、「ずっと憧れていたアラスカに行こう」ということで、1年間休学をしました。1年のうち8ヶ月間、ひたすらアルバイトをしてお金を貯めて、残りの4ヶ月間、冬のアラスカのブルックス山脈の麓にあるエスキモーの村に滞在して過ごしました。一面真っ白な雪に包まれて、行った時期が太陽が昇らない極夜の時期なので、お昼でも夕焼け空みたいなピンク色に世界が染まっていて、そこにエスキモーの人達が暮らしていて、たまにカリブーが闊歩していく。「ああ、こんな世界をずっと夢見ていたな」と、すごく感動して、一番見たかったオーロラも、この時3週間待ってやっと見ることができました。それもツアーで行くような場所じゃなくて、犬ぞりの冒険家達と一緒に山の中に入って、森の中でオーロラが空を舞っているのを見てすごく感激をして、「ああ、本当に休学をして良かったな」と思いました。

これで満足をして、このまま旅は終えて、まっとうな道を進もうと、この時覚悟をしたんですけども、大学に復学して5年の時、研究室に配属されながらも、やはりアラスカが忘れられなくて、また行くようになりました。

それまで、私は生きることとか、色々なことに全て理由があって、その答えが見つかると思っていたんですけども、アラスカで旅をして、ツンドラの大地に座って山を見たり、マッキンリー山を見たりしている時に、全く何の感情でもないんですけども、ただただ鳥肌が立ってザワザワして、感動することに理由なんてないんだなと、はっきりとその時に気づきました。理由なんてないんだけど、すごく感動するという気持ちが大変で、それによって自分は力を得て、原動力となって、自分の道を探しながら進んでいけるんじゃないかと思いました。

そのまま極地の研究に行きたかったんですけども、研究分野をガラッと変えて、他の大学院に行ってやっていく覚悟がすぐにはできなくて、ずっと悶々とした日々をまた1年くらい送っていました。このままじゃいけないということで、何かはっきりと自分で覚悟を決めて納得して進めるようなきっかけが必要だと思いました。この時、思い立

ったのが、当時住んでいた京都から青森まで日本海側を自転車で進んで実家まで帰ること。5月くらいに京都を出発して、日本海側をシュラフとコンロだけを持って、ずっと毎日100キロちょっとずつ進んで行って、15日間かけて、やっと実家にたどり着きました。本当に毎日100キロ以上漕いで、誰ともしゃべらずに、風呂にも入らずの15日間。雨にも打たれながら、秋田のあたりはものすごい強風で辛かったりというような旅で、全く楽しいということはありませんでした。これによって、「よし、やっていけるぞ」という覚悟を得ることができました。

その後、極地研究所に転学することにして、やっと極地の研究をここから始めることができるというのが2006年でした。

南極でよく目の当たりにするのは生きてることと死んでいることがはっきりと見えて、かつ、それがつながっていること。樁池を調査していた日のこと、赤茶けた河川みたいな場所で、体長大体90センチくらいのアザラシの赤ちゃんのミイラが寝ていて、その周りに、苔が緑にきれいに取り囲んでお墓みたいになっていました。これ、アザラシの赤ちゃんが死んで、それが分解されて栄養分があるので周りに苔ができていくというだけのもんですが、このアザラシの赤ちゃんの肉片を持ち帰って年代分析をすると、2,000年前という値が出てきました。湖の奥に海があって、この赤ちゃんは湖に迷い込んでここにきて、多分お腹がすいてしまって絶命したということなんですが、そこから2,000年間、ずっとここに眠っていて、2,000年かけてやっと分解されて、次の生き物に伝わっていくと、命とか物質の瞬間をまざまざと見せつけられました。

その数日後なんですけれども、キャンプしていた近くに、親とはぐれたアザラシの赤ちゃんがきて、親を捜し回ったのか、お腹もいっぱい切れていて、湖の中に入って海からどんどん離れて行きました。海から離れていくとエサも何もなくなるし、戻ることができなくなるので、もう見ながら、「こっちはじゃない、あっちだよ」と言いながらずっとついて行くんですが、もう見えない所まで行ってしまいました。少し触って動かしたりとかもしたいんですけども、やっぱりそこは目に見えない自然の掟のようなものがあって、私達はただの侵入者、絶対介入してはいけないんですね。ものすごく悲しく切ない気持ちになったんですけども、この時本当に思ったのは、誰かの命が亡くなって、誰かの命になっていくと。それが生命とか物質の循環。

そういうのが最初から生き物にはあるから、生きるということは悲しいものなのかもしれないと根源的に思いました。ただ、ネガティブな悲しさではなくて、普通に眼前にただある悲しさですね。決してそれが涙が出るように

悲しいというものではなくて、「生き物ってそういうものだな」と、つくづくこういう時から感じています。

アラスカに行っていた頃、私は、生きることにあまり肯定的でなくて、その理由に祖母の病気がありました。脊髄小脳変性症という運動を司る部分が縮小して、体が動かなくなってしまうような病気でした。あるとき、母方のおじさん2人に順番に同じような症状が出てきて、はじめて母親に病気のことを聞きました。この病気はほとんどが遺伝性だと聞かされ、自分も動き回れなくなってしまうかもしれないということは、何か生きていることって意味がないんじゃないかと感じるようになっていきました。

それがずっと続いていて、旅をして、色んなことをして悶々としているうちに、逆に祖母の病気によって自分の生きる持ち時間、それから色んなことをする持ち時間というものにはリミットがあるということを感じさせられて、逆にその病気のことが生きることへの、大きなパワーに変化していきました。それで、「そうだ、好きなことをしてしまおう」というような、シンプルな答えに辿り着きました。

わざわざ何で現地に行って研究をするのかということをよく聞かれるんですけど、色々紹介してきたように、狙ったわけではない場所にすごく大きな発見があります。今、インターネットとか衛星網とか、色んなものがつながってデータをとったりして室内で研究を進めることができるのですが、それだと狙ったことじゃない発見というのはほぼありません。現地に行って、色んなことを見ながら副産物的なものを肌で感じながら次の目標とか、真理に近づいていくということが非常に重要だと思っています。

それから、本当に物理的に誰も見たことのない世界に初めて行って、初めて自分が第一人者として出会うことができる、そこから得たものを世界で初めて自分のストーリーに創り上げて、世界を描写して、うまく皆に伝えたりすることができる。

また、机上で分かったつもりになっていたことが全然分かっていなかったということをはっきりと気づかされるのも、打ちのめされるんですけども、それもすごくいいことだと思っています。

あと、生き物とか自然を研究しているので、本当に現場に行って、現地がどんな環境か、生き物がどうやって暮らしているかということをはっきりと感じないと、真にその対象を理解することはできないと思っています。

ということで、今日のお話は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(塾生)

女性が活躍するには、なかなか厳しい仕事、フィールドかと思うんですけども、その中で苦労をしたこととか、逆に女性だからこそ役に立ったみたいなのところがあったら教えてほしいと思います。

(田邊講師)

女性だから苦労したというのは、私は実はあまりなくて、ただ、周りの女性の隊員と研究者を見ていると、自分が一番働ける油がのっている時期と子育てとか子どもを産みたい時期が全く一緒だということで、その2つを両立させたい、かつ南極もやりたいという人はすごく苦労をして、なかなか続けられずにいます。

あとは、どうしても女性の方が体力がなかったり、そこはちょっと手伝ってもらったりしつつ、自分も負けないように筋トレをしたりしています。また、たぶん女性の方が細やかに気を配ったりできるので、リーダーになった時に周りへの配慮とかがうまいんじゃないかなと思ったりもします。それからちょっとずるいんですけども、自衛隊員とヘリコプターの打合せとか交渉をする時に、先輩の男性隊員だったらダメだったけど私が行ったら大丈夫だったということがあったりして、うまく使えばいいんじゃないかと思っています。

(塾長)

今日話を聞いて、田邊さんが訴えかけたいことの1つに、有限なる命である、それも受け継がれた命を精一杯生かす、好きなことをやるということが僕は一番感じたんですね。そういうことでいいのか、最後に訴えたいことを一言お願いしたい。

(田邊講師)

まさに今言ったことが伝えたいことの1つです。もう1つは、本当に自分の体をフルに使ってやってみようということです。現地に行ったり、自分でやらないとその土地のちょっとした湿度とか風とか匂いとか、そういうことを感じるができなくて、そういう中に何かヒントとか発見が絶対に隠されていると私は思うので、本当に自分の足、それから手とか鼻とか目とか口とか全部使って、とにかく生きていくということを今日は一番伝えたかったです。

(塾長)

今日は本当に貴重なお話をありがとうございました。

■ 10年後、自分達はどうありたいか。そのために今、自分達にできることは何か。

グループディスカッション

10年後、青森県が、自分自身がどうなっているべきか目指す姿を考えた上で、その目指す姿に近づくために、今自分達がやらなければならないことについて議論。

グループ	論 点
A	10年後も住み続け、同年代の仲間を増やすためにUターン者を増やす。仕事や経験を伝える「社長パーク」「部長パーク」「担当パーク」を実施。
B	人が集まり、消費活性化、QOL向上を目指し、プロ野球の試合・キャンプ誘致とテーマパークの建設。